

「K-20 怪人二十面相・伝」

★★★★

2008（平成20）年11月25日鑑賞く東宝試写室>

監督・脚本：佐藤嗣麻子

原作：北村想『怪人二十面相・伝』（小学館刊）

遠藤平吉（サーカス団の曲芸師）／金城武

羽柴葉子（羽柴財閥の跡取り娘、明智の婚約者）／松たか子

明智小五郎（名探偵）／仲村トオル

源治（サーカス団の天才からくり師、泥棒集団のリーダー）／國村隼

菊子（源治の妻）／高島礼子

小林芳雄（少年探偵団のリーダー）／本郷奏多

シンスケ（サーカス団の少年）／今井悠貴

浪越警部／益岡徹

謎の紳士／鹿賀丈史

2008年・日本映画・137分

配給／東宝

<1949年は戦後？それとも・・・？>

元航空幕僚長の田母神俊雄氏の論文は、1945年8月15日に日本が敗戦を迎えたことを当然の前提としたもの。また、1949年生まれで団塊世代の私は、戦後生まれであることに何の疑問も持っていなかったが、この映画冒頭の時代状況の説明を聞いてビックリ！それは、1942年12月8日の真珠湾攻撃によって始まった太平洋戦争のみならず、何と第2次世界大戦が回避されたという驚くべき歴史的事実の告知から・・・。

そして時代は今、1949年。舞台は日本の帝都。私が知っている日本は1945年8月15日の敗戦によって突然民主主義国家に変わり、憲法はもちろん刑事訴訟法も全面的に変わったはず。また天皇は日本国の象徴として残されたものの、華族制度は廃止され1789年のフランス革命のように「法の下での平等」が確認されたはず。ところが第2次世界大戦が回避された日本国の1949年は？

<この映画が描く1949年の日本は？>

この映画は天皇制については何も触れていないが、明治初期から続く華族制度は当然のように存続しており、松たか子扮する羽柴葉子は羽柴公爵の娘。そして、私が小学生時代からよく知っている明智小五郎（仲村トオル）はこの羽柴葉子の婚約者で、何と男爵。そんな厳しい身分制度が存続する中1949年には、小泉改革後に激しくなったといわれる格差社会以上の極端な格差社会が生まれたようで、帝都の富の9割がごく一部の特権階級＝華族に集中したとのことだ。なるほど、こりゃ実に面白い仮説。少なくとも荒唐無稽な(?)田母神「論文」以上に面白い。

少し残念なのは、そんな時代状況についての説明が簡単すぎるため、イマイチすんなりそんな時代に入っていけないこと。1949年が戦後でないとしたら、華族社会が続いていること、絶対的天皇制の存続や徴兵制を前提とした軍部支配の実態なども、もう少し明確に説明してほしい。ちなみに、金城武扮する遠藤平吉が怪人二十面相として誤認逮捕され尋問を受けるシーンは、少なくとも新憲法と新刑法にもとづく取調べではなく、明治憲法と旧刑法にもとづく自白偏重そして拷問による自白獲得を目指す取調べであることは明らかだ。1945年8月15日の敗戦なかりせば、1949年の日本はさもありなん、と多くの部分で納得できるだけに、もう少し丁寧にそんな時代状況を説明してほしいと思うのだが・・・？

ちなみに、1949年に街頭テレビがあり、そこに人々が集まっていたの？これは現実には1950年代後半から60年前半にかけてみた日本の風景では？もっとも、あの敗戦がなければ、この映画のように日本のテレビ開発速度は10年は早まっていた可能性も・・・？

<小学生の時になじみの人物たちが続々と>

小林少年と少年探偵団、そして明智小五郎と怪人二十面相は1949年生まれの私が、小学生の時になじみの人物たち。マンガしか読んでいない(?)麻生総理は国語力の乏しさをさらけ出してしまったが、小学生時代の私はマンガではなくレッキとした江戸川乱歩の少年向け探偵小説で、彼らの活躍ぶりに胸を踊らせながら読んだものだ。

そんな物語が北村想の『完全版 怪人二十面相・伝』として出版され、人気を得ていることを私は全然知らなかったが、それが2009年の東宝のお正月映画として公開されると知ってビックリ。怪人二十面相のことを「K-20」とネーミングするのはいかにも今風だが、主要人物のキャラクターは永久に不変のはず。

そう思っていた私だが、金城武扮するサーカスの曲芸師遠藤平吉なる人物は私が今回はじめて接するもの。また松たか子扮する羽柴財閥の娘、羽柴葉子なる人物もそう。映画はそんな遠藤平吉の紹介から始まり、明智小五郎と羽柴葉子との結納の儀に遠藤が写真撮影に出かけたところから波乱の幕開けとなる。こりゃ面白そう・・・。

<國村隼がいい味を>

この映画は格差社会が1つのテーマ。それは怪人二十面相という興味深い人物が登場してくるために不可欠な社会経済的基礎。そんな格差社会を鮮明に印象づけるべくこの映画がみせるのは、第1に泥棒集団、第2に親を失った子供たちの集団だ。親を失った子供たちの集団のリーダーとなるのはサーカス団員だったシンスケ少年（今井悠貴）だが、泥棒団のリーダーとなるのがサーカスにいた源治（國村隼）。

この映画の最大のポイントは、羽柴財閥が秘密を握る「テスラー」。これはエネルギーを移転する大発明だが、これが軍事兵器用に利用されれば大変なことに・・・。たかがサーカス出身、たかが泥棒のくせに(?)源治は技術者であると同時にすごい知識人。だって遠藤平吉がスパイダーマンのように自由に空を飛び回れるのは、源治が発明し平吉の右手にセットしたある小道具によるもの。さらに、後半のハイライトとなる「テスラー」の破壊シーンでは源治の知識が大いに役立つこととなる。

この映画の主人公は平吉、明智そして葉子の三人だが、平吉を支える影の参謀のような役割の源治を演ずる國村隼がいい味を。

<『バットマン』と対比すれば・・・>

クリスチャン・ベールがバットマンに扮した、『ダークナイト』（08年）は、敵役となった最凶の怪人ジョーカーを演じた亡ヒース・レジャーの熱演もあって大ヒット（『シネマルーム20』 頁参照）。それに対し、渡辺謙も登場し、バットマンの誕生秘話を描いた『バットマン ビギンズ』（05年）の出来はイマイチだった（『シネマルーム8』127頁参照）。そんな印象をもっていた私が、この映画を観ながら思ったのは、これはいわば怪人二十面相の誕生秘話だということ。

怪人二十面相はその名のとおり変装の名人だから、その変装術によってあつと驚く場面をつくり出すことが多い。『怪人二十面相』モノが長い間ヒットし続けているのは、そんな変幻自在の変装術のためいろいろと面白いストーリーをつくることのできるから。サーカスで曲芸師をしていた平吉に多額の金を積んで、明智と葉子との結納の儀の写真撮るよう依頼してきたのは一体誰？怪人二十面相の予告を受けて、刑務局や軍隊が警戒体制をとる中、会場の某所に忍び込んだ平吉がカメラのシャッターを押すと、何とそれは起爆装置のスイッチだったから大変。会場は大混乱となったが、そこで平吉はあえなく逮捕。ところが、これによって怪人二十面相逮捕と帝都中に知れ渡ったから、平吉の迷惑はいかばかり・・・。

さあ、そんなストーリーが展開していく怪人二十面相の誕生秘話とは？こりゃ面白いよ。

<一部わざとらしいコント風演技の是非は？>

この映画は2時間17分と長いが、エンターテインメント作品としては上出来。しかし、一部わざとらしいコント風演技が目についたのは私だけ・・・？

公爵令嬢の羽柴葉子は明智とスナリ結婚することに何やら不満そう。もっとも、これは明智小五郎が気に入らないためではなく、敷かれたレールの上に乗って結婚するだけではつまらない、何かもっと自分のすべきことがあるのでは、と考えているためらしいから、葉子は当時の公爵令嬢としてはちょっと変わった女・・・？他方、明智小五郎はあくまでやさしく葉子に接していたが、葉子が衣装合わせをしている中、変装して忍び込んできたのが怪人二十面相。どうやら葉子から「テスラー」の秘密を聞き出すために忍び込んできたらしい。

そこから始まるのが、源治の尽力によってうまく刑務所から脱出し、今や源治の指導の下に泥棒修行に精を出している平吉と二十面相との追跡劇。ここでの平吉の役割は、追われている葉子を怪人二十面相から救出することだ。

葉子は公爵令嬢に似合わず逃げ足も早く活発なお嬢さんだから、松たか子にピッタリ？それはともかく、松たか子を筆頭に、仲村トオルも金城武も時々わざとらしいコント的演技をみせる。これはきつと安直なテレビドラマに見慣れた若者を意識し、その層へのサービスを狙った演出だろうが、その是非は・・・？

<「知恵比べ」＝「騙し合い」の醍醐味をタップリと>

本来の「怪人二十面相」は、二十面相と明智小五郎との「知恵比べ」＝「騙し合い」が見モノ。しかしこの映画では、平吉はもともと怪人二十面相ではなくサーカスの曲芸師。そして怪人二十面相はそんな平吉をうまくたぶらかした、顔にキズのある男。したがって、この映画における怪人二十面相として誤認逮捕された平吉と明智との最初の出会いはもちろん敵としてだったが、そこには葉子も絡み、何と牧歌的なものが・・・？

しかし、いつまでもそんな雰囲気が続いたのでは映画の緊張感がなくなってしまうからヤバイ。そこで、明智と平吉との間で真剣な「知恵比べ」＝「騙し合い」が始まるのは映画後半からだが、最初は圧倒的に明智が有利。だって知恵比べでは平吉が明智にかなうはずがないのは当然だから。いや、そんな負け犬根性ではダメ。いくらサーカスの曲芸師あがりだといっても、今や平吉は泥棒の免許皆伝を極めた天才曲芸師。

ここでは決してネタばらしはできないが、映画後半から次々と続く平吉と明智との「知恵比べ」＝「騙し合い」の醍醐味をタップリと。